

他者との関わりによって子どもが考えを更新していく授業づくり

—英語科における授業観察と実践を通して—

寺島 未歩 教職基盤形成コース 教科授業力高度化プログラム

キーワード：考えの更新，言語活動，思考力・判断力・表現力等

1. 研究の背景と目的

本研究の目的は、授業における他者との関わりを通して、子どもが自分の考えを更新していく授業づくりのために、教師が実践することについて明らかにすることである。

筆者は、学部生時代に行った中学校英語科の授業実践において、子どもの思考に寄り添い、子どもがさらにその思考を深め、更新していくような授業をつくっていきたく願っていた。しかし、その前提となる子どもの思考を捉えることに、課題があると気付いた。

考えを更新するとは具体的にどのような状態かを、友とのやり取りを通して、自らの考えを更新した A 児の姿から、説明する。友がグループで作成した英語のビデオレターについてコメントをする活動で、A 児は初め、相手を思いやり、改善点は伝えなくてよいという考えをもっていた。しかし、相手のための建設的な意見として改善点を伝えた方がよいと考える友とのやり取りから、伝え方に気をつけてコメントをすると、自らの考えを更新した。このように、自分とは違う考え方に会った時、考えの更新が起こる。考えを更新するとは、A 児のように、自分の考えと相手の考えを組み合わせる場合もあれば、相手の考えを自分の考えとして取り入れたり、相手の考えを受け取った上で自らの考えに改めて納得したりする場合もある。このことは、中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説外国語編においても、多様な人々との対話を通して、考えを形成したり再構築したりするとして述べられている(文部科学省, 2017, p. 10)。さらに、柳澤(2023)において、友の考えと自分の考えを比較することで自分の考えを再構築することが、実践から明らかにされている。

これまでの筆者の授業実践を振り返ると、授業の中で子どもの思考を捉えることができず、そのため、子どもが考えを更新する姿を把握することもできなかった。

そこで本研究の問いを、「授業における他者との関わりを通して、子どもが自分の考えを更新していく授業づくりのために、教師はどのように子どもの思考を捉え、どのように子どもに働きかけていくか」と設定した。

2. 方法

授業観察を主に行った 1 年次には、教師はどのように子どもの思考を捉え、どのように働きかけるのかを、小学校および中学校における授業観察を中心として明らかにした。授業実践とその省察を主に行った 2 年次には、授業観察を通して得られたことを踏まえ、子

どもが他者との関わりを通して、考えを更新する授業づくりについて、実践と省察を繰り返しながらその具体を明らかにした。なお、2年次は非常勤講師として、中学校1年生英語科の授業を担当し、継続的・長期的に授業実践を行う機会を得た。

3. 結果と考察

3.1 授業観察から得たこと

3.1.1 子どもの思考を捉えるために、その子の考えを、その子自身の言葉で「聴く」

海外の小学生との交流活動の一環で、B児は、自分宛に届いた“*What’s your hobby?*”という質問に、Google 翻訳を用いながら返信を考えていた。『趣味は、化石や遺跡を発掘することです。』と入力した後、「これは趣味じゃないな。」とつぶやいて削除し、『趣味は、穴掘りです。』と入力し直したB児の姿があった。筆者がB児に考えを尋ねると、「趣味はいつでもできるものだという感じがする」こと、「本当は化石や遺跡の発掘が好きだが、イベントでないとできないので、穴掘りとした」ことが分かった。このやり取りから、B児が「趣味」という言葉をどのように捉えているか、また自分にとって、化石や遺跡の発掘や穴掘りが、どういうものかについて考えていることを理解することができた。入力したものを消したという、外から見た行動だけではここまでは捉えることはできず、やり取りによって、B児の考えていることを捉えていくことができた場面だった。

このように、子どもの思考を捉える際には、子ども自身の言葉で、考えていることを聴くことが大切だと言える。

なお、子どもの思考を捉える際には、子ども同士のやり取りを基に、相手の考えをどう解釈し、それに対してどう考えるかを尋ねることから捉えていく場合もある。

3.1.2 異なる視点での考えを共有する働きかけが、子どもの考えの更新に繋がる

教科書の登場人物の視点で、自分たちの学校を訪れる海外の姉妹校の中学生へ、着物、空手、書道の中から、おすすめの体験を考える場面で、C生は3つのうち全てを薦めようと提案した。同じグループのD生とE生は、自身が書道に対してもっている印象や経験という視点から、難しいことや、左利きの人が楽しめないことを理由に、意見を述べていた。C生は、“*Shodo has many rules, but we don’t have to make them strictly.*”と述べ、D生やE生の意見に納得しきれない様子だった。そこで教師は、実際に書道を習っているF生に、考えを尋ねた。F生は“*I’m learning shodo. If I use my left hand, it’s not shodo. I want the students to keep the rules.*”と述べ、経験という視点は同じでも、習い事としての経験という視点からの意見を述べた。C生は自分の考えや一連のグループでのやり取りとも違う、新たな考えの視点を得ることができたと考えられる。

このように、考えの更新に繋がる働きかけとして、ある子どもに対して、異なる視点で考えている子どもの考えを共有することが挙げられる。子どもは、新たな視点と出会うことで、物事を多面的・多角的に捉えたり、自分の考えを吟味したりして、考えを更新していくと考えられる。

3.2 授業実践と省察から得たこと

3.2.1 「A Pot of Poison」・中学2年（令和3年11月）

授業観察から得られた視点を踏まえ、教師が、子どもの言葉から思考を捉え、異なる視点での考えを共有することを目標に、本実践を行った。物語“A Pot of Poison”を読み、話の概要と登場人物の人柄を捉え、それを根拠に話の続きを考えて演じる、全3時間の単元展開を構想し、実践した。

話の続きを考える際、G生は、登場人物である和尚に対してもつ自分のイメージを根拠に、自らの考えを主張した。自分とは反対の考えをもっていたH生やI生と、お互いに質問をしたり、相手の考えに対して意見を述べ合ったりする姿は見られなかった。異なる視点として友の考えに対してどう考えるかという教師の働きかけにも応じず、G生は自分の意見を主張し続けた。授業の終末、G生は、「グループ内でも、全体共有されたグループとも、違う意見を持っていたが、それぞれ違って面白かった」と振り返った。このG生の姿は、相手の考えを受けて、自分の考えに改めて納得する形での、考えを更新する姿と捉えることができる。

別のグループにおいて、J生は、自分とは異なる考えをもつK生の考えを聞き、自分の考えを主張することなく、K生に同意した。K生の考えに理由と根拠があることでの納得と、自分の考えよりも面白いという、考えの更新があったと考えられる。

この実践を通して、子どもの言葉から思考を捉えようとしたことで、子どもが考えを更新する姿を捉えることができ、その更新にも様々な形があるということ捉えることができた。

しかし、G生が本当にH生やI生の考えを理解しているかははっきりと捉えられていない。単に異なる視点での考えを共有する場を作るのではなく、新たな視点での考えに出会った子どもが、どのようにそれらを咀嚼し、考えを更新していくかを捉えることが大切だと考えられる。この時、子どもの考えを捉えるための視点が、筆者の中では明確ではなかった。その視点を具体的にするために、子どもの単元の終わりの活動のイメージから、具体的な考えの視点を予想して授業を構想すること、その視点をもとに子どもの思考を捉えることで、考えの更新に繋がる働きかけができるのではないかと考えた。

3.2.2 「自分の住んでいるまちについて紹介しよう」・中学1年（令和4年9月）

3.2.1の実践で得た課題を踏まえ、子どもが考えを更新することに繋がる働きかけを教師がすることを目標に、本実践を行った。自分の住んでいるまちについて、ALTの先生に紹介文を書くために、教科書でのまち紹介を参考に、自分の視点で紹介する、全10時間の単元展開を構想し、実践した。筆者は、子どもが単元の終わりに書く紹介文のイメージから、「何があるか」「できること」「具体例」「例え」「経験」「感想」等の考えの視点が出てくることを予想し、子どもが新たな考えの視点に出会えるような働きかけをすることができるようにした。なお、本実践において子どもたちは、思考ツールであるウェビングマップによるメモの作成及び更新を、繰り返し行った。

L 生は、長野市について紹介するために、情報をメモに整理していたが、善光寺でお戒壇巡りができるという情報から先に考えが広がらず、困り感を抱える様子があった。そこで教師は、L 生の具体的な「経験」を視点に、必要な時間や歩く距離の詳細、感想等を尋ねた。その後、L 生は自分の経験から得た情報をメモに整理し直し、単元の終末には、「経験」の視点を加えた紹介文を書いたり、「そこに何かあるかだけでなく、何ができるかということと言うと、詳しく伝えられる」と振り返ったりした。

一方 M 生は、長野駅や善光寺を挙げていたが、それらについての話題が深まらない様子があった。そこで教師は、M 生とは異なる視点を持つ N 生の考えを、全体で共有した。N 生は、須坂市の中でも、自分のお気に入りのお店を選択し、そこで買える商品や自分の好きな商品などについて述べ、「自分から見た須坂市」という視点で紹介をした。M 生はそれを踏まえ、有名なところでなく、「自分から見た長野市」という視点でメモを更新し、単元の終末には、自分が住む地域にある好きなお店を紹介して、「自分だけの言葉、オリジナルな文章で伝えるのがとても楽しかった」と振り返った。

この実践を通して、新たな視点と出会えるような教師の働きかけにより、子どもが考えを更新する姿を捉えることができた。具体的な視点をもって子どもと関わることで、子どもの思考を捉えやすくなり、捉えた考えの更新に繋がる働きかけをすることができた。授業を構想する段階で、単元の終わりに見たい子どもの姿から、予想される考えの視点を具体的に挙げておくこと、そして授業の中で、その視点をもとに子どもに働きかけることが大切だと言える。しかし、本実践において捉えられたのは、教師との関わりによる考えの更新であり、またその変容は、即時的なものであった。今後の授業実践においては、子どもが、子ども同士でのやり取りを通して考えを更新していく姿や、単元を通した子どもの考えの更新の様子を捉えていきたい。

4. 結論

授業観察及び授業実践を踏まえ、教師は、子ども自身の言葉から子どもの思考を捉えられるということ、また、具体的な視点をもった上で子どもの思考を捉え、新たな視点での考えを共有するという教師の働きかけが、子どもの考えの更新に繋がると言えることが分かった。これにより、他者との関わりを通して、子どもが自分の考えを更新していく授業を実現していくことができると考えられる。

文 献

文部科学省. (2017). 『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語編』

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_010.pdf

柳澤征之. (2023). 「信州大学教育学部附属長野中学校 英語」令和 4 年度長野県中学校連合教科研究会. 2023 年 1 月 20 日. 発表資料